

## Writing Beyond the Mother Tongue

(母語を越えて書く)

—作家・バーミンガム大学上級講師 ダン・ヴィレータ氏を迎えて—

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「創作と翻訳の超領域的研究」

### 【ワークショップ】‘Possibilities for Creative Writing’

(クリエイティブ・ライティングの可能性)

日時：2018年5月28日(月) 10:40-12:40

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館第1会議室

講師：ダン・ヴィレータ氏(バーミンガム大学上級講師)

### 【講演】‘Why write?, and other questions for the wee small hours’

(なぜ書くのか?—夜半を過ぎて思うこと)

日時：2018年5月29日(月) 16:30-18:00

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館第10会議室

講師：ダン・ヴィレータ氏(バーミンガム大学上級講師)

2018年度より早稲田大学総合人文科学研究センターに、新たな研究部門として「創作と翻訳の超領域的研究」部門が発足した。部門発足記念イベントとして、作家でありバーミンガム大学上級講師でもあるダン・ヴィレータ氏をお迎えし、「Writing Beyond the Mother Tongue (母語を越えて書く)」というテーマで、二日間にわたってワークショップとご講演をしていただいた。

ヴィレータ氏は、チェコ人の両親のもと、ドイツで生まれ育ち、イギリスに渡ってケンブリッジ大学で歴史学の博士号を取得された。その後カナダのアルバータ大学をはじめ、ドイツ、アメリカなどで教壇に立ち、現在はバーミンガム大学でクリエイティブ・ライティングを教えている。Exophoric writer (母語以外で書く作家)の一人として活動しており、作家として *Pavel & I* (2008、8カ国語に翻訳)、*The Quiet Twin* (2011)、*The Crooked Maid* (2013)、*Smoke* (2016) をいずれも英語によって執筆・出版されている。

ワークショップは「Possibilities for Creative Writing (クリエイティブ・ライティングの可能性)」という題目で、JCulP (国際日本文化論プログラム)の学生を中心に行われた。本ワークショップでは、『旧約聖書』のサラとアブラハムの物語を題材に、学生に問いを投げかけながら、主観性などをキ

ワードとして、どのような文を創作できるかについて講じられた。その後は、実践として、与えられたひとまとまりの文章に、自分でオリジナルの文章を付け加えるという課題をヴィレータ氏が出され、学生がそれぞれの考えを発表、ヴィレータ氏がコメントをつけるという流れで進められた。

ご講演は、「‘Why write?, and other questions for the wee small hours’（なぜ書くのか？—夜半を過ぎて思うこと）」というテーマで行われ、およそ 30 名が来場した。ヴィレータ氏が自らのご著書を朗読された上で本題へと入り、どうして英語で書くのかなど、ポイントごとに詳細にお話しされた。ご講演後は、会場からの質疑応答を経て、盛況のうちに閉幕した。

なお、本イベントについては、総合人文科学研究センターが発行する、オンライン・ジャーナル *Waseda Rilas Journal*, No.6（2018 年 10 月刊行予定）の部門特集記事で詳細に取り扱う予定である。

（記録：常田慎子）

